

シーン2

「おはよ、もう夕方だよ」

「……え、昨日のことが… 夢なわけじゃないじゃない。くすすつ、あれだけ激しくエッチしたのに」そんなこと言っちゃんだね？ なんか、さみしいかも♡」

「うん、そうだよ、リアルであったことだよ♡」

「ボクが妖魔になっちゃったことも」

「キミが幼馴染のふたなりチンポで、アナルを犯されまくって、ヒイヒイよがりくるっちゃことも、せ〜んぶ現実だよ。んふっ♡」

「起きてすぐで悪いけど、キミのこと今から犯しまくって、ボクと同じ素敵な妖魔に墮としてあげるねっ」

「キミの寝顔見てたら、ほら、こんなに勃起しちゃった。そんな怖い顔しないで、悪い話じゃないよ」
「ボクとセックスを楽しみながら、もっと気持ちよくなって、なんのしがらみにも縛られない、ドスケベな体になれるんだから。」

「人間のしがらみにとらわれない、ただ、気持ちいいだけの快楽にまみれた、世界が待ってるんだよ。」

「だからあ、逃げようとしてもムダだつてば。すでにキミはボクの展開した異界領域の中にいるんだから。普通は妖魔になり立てだと、ここまでできないんだけど、ボクの場合、元退魔巫女つてもあるのかもっ」

「夕方でも異界領域を張れるようになってみたい。退魔巫女の修行、頑張ってた成果が出たのかなあ。」

「妖魔になって成長を実感するなんて、なんか不思議な感じだよね。」

「けど、これって、逆に言えば、退魔巫女の関係者を狙って墮としていたらあ♡ はあはあ、すぐにも強力な妖魔の軍団が作れるってことだよね……これ、さうそく大妖魔様にご報告してえ、いっばいドスケベレイプう、してもらわなきゃ、あはっ♡」

「けど、その前に、大好きなキミを墮とさせてほしいなっ」

「ボクのごつりギトギトの濃いザーメンをお尻でたっぷりと受け止めて、ボクの眷属になってよ♡ 拒否なんて、もう無理だよ。キミは祈禱師見習いで普通のヒトより強いけど、ボクにアナルを犯されて中出しされてるし、さつき寝てる間も、ずっと一緒にいたんだから知らないうちにボクの妖気に、体を蝕まれてるんだよ」

「それに幼馴染で一緒にいた時間も長いから、もともと相性もいいし。あと一回、お尻に出されちゃったら、確実に妖魔堕ちするよお♡」

「毎日、ボクのふたなりチンポで犯してもらわないと、頭、おかしくなっちゃう、マゾ妖魔にね、くすっ」

「けど、ボクもキミのこと犯したくって、たまらないし♡ オチンポだつて、びっきびきにそり返つてえ、先っぽからカウパー、垂れ流しひゃつてる…♡」

「それじゃあ、最初はやっぱりキスからかな。ん、わかってるよね？…ただのちゅーじゃないよ。」

「ほら、キミの目の前にあるボクのふたなりチンポのさきっぽ。ここに、んちゅぼつて、エッチなキスしちゃおつか。」

「もう逆らえないって。ボクの先走り汁には、ふう、ふうっ、オスを誘うフェロモンがたっぷり混ざって、今すぐにも、口づけしたくって、たまらないよね？」

「ほら昨日のキミをいっぱい犯して気持ちよくアクメさせたまくったボクのおチンポだよ♡」

「ぎんぎんに勃起してキミをまた犯したくて仕方ないんだ♡」

「さ、はやくはやく♡」

「うん、そうだよ。ボクの前にひざまずいて——んんっ、そのねちっさいキス、いい♡」

「唇の感触だけで、ふう、ふうっ、イきそうっ♡ キミだつて抵抗する気も起きないよね？」

「はあはあ、やっぱりボクとは相性が抜群だね、体はすっかり正直になっちゃってるね、オチンポれろれろするなんて」

「あふ、はふっ♡」

「そのままへろをいやらしく突き出してそうだよ、勃起チンポ、アイスクャンディーみたく、いっぱい舐めしゅぶつて、ん、んん♡」

「物欲しそうに顔で息を荒くして♡」

「そのまま、はあはあ、唾をこんで唇をぎゅうって窄めて、頭を振って♡」

「素直にフェラチオはじめるなんて、本当にいいコ♡ すぐにボクのふたなりチンポで眷属に変えてあげる♡」

「んんっ、そうだよ、首を左右に振ったり、喉奥まで先っぽを吞み込んで、お口でじゅぼじゅぼしてえ、はあはあ、キミのひょうとフェラ顔、見るだけで、だんだん興奮してえ、んんっ、せーし、上がってきてるっ♡」

「ね、フェラなんて初めてなんだよね？…なのに、こんなにドスケベで、大胆で、はあはあっ、オチンポしゅぶる才能にめぐまれてるのかもね、くすすっ」

「はあはあ、キミの舌と唇で、亀頭全部がちゅぼちゅぼされてえ、んんん、このまま出ちゃいそう。」

「ごめんね、もう我慢できないよ。キミの口は、オナホみたく、ん、んん、いっぱい使わせてもらおうかっ♡…そろっ、そろっ♡」

「喉チンポに、ボクのおチンポ先を、こりこり当たって。お、おっ、んおっ♡ すっくく気持ちいいっ♡」

「ほらあ、えすかないで、もつとしっかり首振って、ボクのおチンポで犯されてるんだから、光榮に思つてよ。はあ、はあ♡ 幼馴染の男の子にさせるイラマチオ♡」

「最高に高ぶつてえ♡♡いやらしすぎだつてえ♡♡このまま出すよ。キミのお口に、精液い、ぶちまけちゃうからあ。」

「くううっ、んっうううーっ♡♡♡」

「あ、ああ………出されながら、ふう、ふうっ、そうだよ、舌を使って、いっぱい精液い、吸い出して♡」

「ほらあ、全部、飲み干してよ。苦しくても、んっ、おチンポは啜えこんだままで。」

「あ、ああっ、まだ出るよっ、んああっ、んっあああーっ♡♡♡」

「ぜえはあ………そうだよ出されたボクのせーしも全部飲み干してくれて。本当にエッチでいいコだねっ」

「そのままおチンポをしっかりしゃぶつて、くふ、んふう………キレイにして。エラの内側も、んんっ、先っぽの割れ目も舐めて丁寧にお掃除舐めするんだよ」

「んんっ、沢山頑張れてエライね撫でなでしてあげる」

「ボクのせーし、とつても美味しかったでしよう」

「すっごく悔しそうな顔してるけど、精液ごっくんして最後はお掃除フェエまでしたんだし。くすすっっ」

「さすがのキミも、妖魔の精液の誘いには勝てなかつたみたいだね。んんっ？ まだ、意地を張るんだ。」

「それじゃ、ボクのふたなりチンポの気持ち良さ、キミに教えてあげるよ」

「キミのおチンポも、さっきのフェエで興奮したのか、フル勃起してるみたいだしね」

「ボクのおチンポを、んんっ、キミのに絡めて、んふ、くふう、んんっ、ほらあ、こうやって勃起同士、打ちつけあうと、んあ、んあう、結構、いいでしょうっ」

「んふふう、おチンポ同士でないとできない……ん♡♡んうっ♡♡んっん♡♡ 気持ち良さだよお、んっ、んんっ♡ ぜえ、はあはあ………」

「これで二人のおチンポ、完全に大きくなったかな？」

「このまま、んんっ、竿同士を押し付けて………ボクの手で二本とも握っちゃうね。あれ、どうしたの？ 逃げてもいいんだよ」

「されるがままで、キミもおチンポ、一緒に扱かれないんだ？ それじゃ、おチンポ同時に扱いていくね。ほらあ、シ〜ココロ♡♡」

「あはっ♡♡キミのおチンポ、ボクのふたなりチンポの半分ぐらいしかないけど、ガチガチだよね？」

「気持ちいい？ 気持ちいいよねっ？」

「昨日いっぱい手でしごいてあげて。びゅっびゅって、射精しちゃったからね」

「妖魔退治がなりわいの祈禱師の見習いなのに、妖魔に墮ちた幼馴染の手で扱かれて、よがっちゃってるんだ?」

「はあ〜っ、おつかしい。くすすっっ」

「ね、ボクの手で、無理やり射精させられた時、どんな気持ちだったあ?」

「やっぱり良かったんだよね?」

「扱かれるたびに、気持ちいいので、なんにも考えられなくて、上がってくる精液、出したい、出したいてことだけ、ドスケベに射精することだけ考えてたんだよね?」

「くふふふ、ボクもわかるよ。大妖魔様のオチンポでいっぱい泣かされて、絶頂させられて、嫌なのに快楽で、どんどん頭がとろけちゃうのお♡ はあ、はあっ♡」

「今だって、そうなんだよね。ボクの手コキで、ほらほら、ほらあッ、下腹部で煮えた精液、びゅる、びゅるる〜♡」

「出せ、出せ出せ、思う存分射精しちゃえ♡ びゅるるるる〜♡♡♡」

「あんんっ、キミの濃い精液い、いっぱい噴きあがって、あぶ、はぶう、ボクの顔も、肌も、んぶぶぶう、体中に、キミのミルクう、ぶっかけられながら、一緒に、はあ、はあっ、シユるの気持ちいいっ♡」

「キミも精液、吐き出しながらシユンコ、いいんだよね?」

「って、射精直後のオチンポ扱かれてたら、感じすぎて、答える余裕ないよねっ♡」

「んっ、んんっ、でも、ボクも限界かもっ……キミの亀頭と、ボクのっ、いっぱい押し合いながら、ずちゅずちゅ抜くの、エッチで、しかも良すぎっ♡♡」

「んひ、くひひ、んいっっ、ボクもっ、出るっ、出るっっっ……せえはあ、妖気たっぷりせ〜して、キミも、同じようにドロドロにしてあげるエッチ♡♡」

「んあ、んああ、んあはあーっ♡♡♡」

「おっ、おおっ、出る、出るっ♡♡」

「精液い、びゅっびゅっ、おおっ……♡ せえはあ、ボクので、キミを白く汚していくの、あぶ、はぶぶっ、楽しすぎっ♡♡」

「キミもまた出すんだね、いいよ。一緒に出そうよ、ほらほら、ほらあッ♡」

「あはあ、んはあッ……ボクも、もっつと出してえ、キミのごと、サーメン潰けに、んいっっ、してあげるっ♡♡ さらああああ〜っ♡♡♡♡」

「あぶ、んぶう……んん……せえはあ……ぶっかけられながら……んんっ、ぶっかけるのお……いやらしすぎっ……んぶ、くぶうッ……最高だ、お……♡♡」

「これだけボクの精液を浴びちゃったら、ボクの命令には、とりあえず絶対服従かな? くぶぶう、はあはあ、ほらあ、ボクのふたなり汁っ、んんっ、キミの素肌にたっぷり塗りと塗りつけてあげる」

「ふふ、肌の感度も上がって、アナルのおまんこ化も少しずつ進んでるんじゃない？」

「そらっ、股を開いて。ボクのぶっついオスマラあ、はあはあ、キミに入れてあげるから♡」

「んふっ、そっだよ。座ったままで、両腿を開いて、M字開脚の格好になって」

「くすすっ、お尻の穴あ、いやらしくヒクついているの、ボクからでも、丸見えだよ♡ それじゃ、入れるね。んん、んうっ、んんっ♡」

「先っぽが潜りこんで、ほらあ、どんどん奥までえ、キミの中にふたなりチンポ♡ 入っていくからあ♡」

「んあ、んあああっ♡ ふっ、ふっ、キミのオスマンゴ、すっごい拡がって、んんっ、奥も深くならてるよね♡ オチンポ欲しくて、はあはあ、いやらしく変わっていつてるのかな？」

「ほらあ、奥のところ、ゴムみたいにグイグイ伸びて、ボクのをそり立ったデカチンポお、全部啜えこんじゃってる♡」

「それじゃ、このまま動くね。んふ、くふっ、んんっ、あれ、さっきまでキツかったのに、すぐに肛門も直腸の中もほぐれて、いやらしく絡んできてる…♡」

「キミのアナル、気持ちよすぎて、はあはあ、気を抜いたら出ちゃいそうっ♡ んあ、んあうんっ♡」
「二回目なのに、お尻まんこ、ドスケベに変化しすぎだっ。はあはあ、妖魔に堕ちる前に、メス堕ちしてるなんて、ちょっとマジすぎじゃない？」

「んふ、くふっ、このまま、キミの中を、んんっ♡ ぐちゅぐちゅ混ぜながらあ、んれろ、れろお、れろれるっ、首筋や、頬を舐めまわしてあげるっ♡」

「だって、美味しそうで、はあはあ、キスだけでじゃ足りないもん。はあ、はあ…はあ、はあ♡…♡…♡んれろ、れろじゆる、れろおッ、唾液でたっぷりマーキングして、キミがボクのものだって、他の妖魔連中にもアピつとかないと、はあはあ、誰かに取られるのいやだもん♡」

「れるじゆる、ちゅばちゅ、んれろろお、ふっ、ふっ…キミはボクだけのものだよう♡」

「はあ、はあ♡…はあ、はあ♡…♡ あんっ、どうしたの、お尻の穴、混ぜられて、キミのオチンポ、ビクビクしてるっ♡」

「ね、手コキしてほしい？ くすすっ、お尻責められながら、オチンポ抜いてほしいの？ 黙ってたら、わかんないよ。我慢しても意味ないし。気持ち良くシコシコされたくない？」

「アナルを犯されながら、とろとろになって射精♡」

「本当に気持ちいいよお、この世の極楽、感じてみない？」

「キミがおねだりするなら、いいよ」

「手コキしてくださいっ、自分の口でね」

「ほらあ——」

「んふっ、エッチなおねだりできて、えっ、素直な眷属くんには、ご主人様のボクからご褒美」

「それじゃ、乳首舐めながら、んれろ、れろ、れろちゅば、一緒にオチンポしてこしてあげるね。んちゅばちゅぶぶ、シヨシヨ♡ ちゅばちゅぶぶ、れろ、んれろお、シヨシヨシヨ♡ 射精寸前のオチンポ、んれろ、れろれるろ、ビクビク跳ねて、んぶ、エッチすぎだよ、んれろれる、れるちゅば♡」

「あと少し、もうちよとだよね。ほらほらほらあ、シヨシヨシヨ、シヨシヨシヨ♡、出せ出せ、濃いザーメンびゅびゅびゅ、びゅるるるるって、射精しろ♡」

「ボクも、だっ、出すよお♡ 熱々の精液で、キミの中あ、ドロドロに溶かしてあげるっ♡
「くっっ、くっっ、くっっ、くっっ——ッ♡♡♡♡」

「ほらあ、いっぱい精液い、中に出しながらあ、妖気もたっぷり注いじゃうね、んん、んんんんっ♡」

「はあっ、アナルにどぼどぼあ」

「妖魔ザーメン、ナマ出し、気持ちよすぎっ♡ 大妖魔様に、どびゅどびゅ出されるのが最高だけど、キミの中に出すのにも、ドはまりしちゃいそう……♡♡♡」

「キミも射精と一緒に、祈禱師のつまらないプライド、全部、出ちゃったよね、くぶぶっ。」

「お尻の穴が……んあ、んああ……ボクの精液を欲しがってえ、おまんこみたいに絡んできてるっ……くぶぶぶ、キミの中に私の妖気が入っていくのがわかるよ♡ 自分の中身がザーメンみたいにとろとろの妖気が入れ替わっていくの♡ とっても気持ちいいよね♡」

「もうキミの体は完全に妖魔堕ちしちゃって、はあ、はあっ、メスの悦びを求めちゃってるんだよ。その証に、んんっ、お尻のアナルが完全におまんこの使い心地でえ……ねちっくズボズボするだけ、んぶ、くぶぶ……無意識でボクに媚び売っちゃってるし♡」

「これでキミも完全にボクの眷属だね。命令には逆らえないし、むしろ喜んで言うことを聞いてちゃうっ、また、昔と同じように二人一緒だね。」

「ちよと、やることは違うけど、これからはドスケベな妖魔として人間たちを面白おかしくオモチャにして、犯しまくっていいからねっ」

「危険な妖魔退治よりも、よわっつい人間をいたぶって、気持ち良くなれるこっちのほうが、ずっくと楽しいよお」

「♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」